

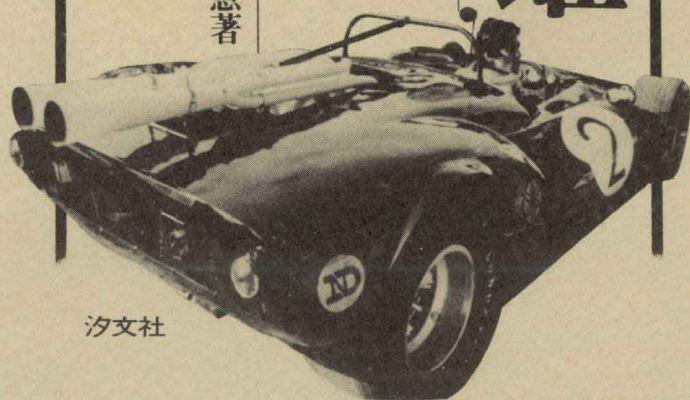
福沢幸雄

事件

トヨタを告発する

青木 慧 著

同時代叢書



汐文社

福沢幸雄事件

ヨタを告発する

青木 慧 著



著者紹介

あおき さとし
青木 慧

1936年，兵庫県に生まれる

ルポライター

現住所 千葉県船橋市高根台 3-1-158-3

TEL 0474-62-9120

福沢幸雄事件—トヨタを告発する—

同時代叢書

1979年10月10日 第一版第一刷発行

定価1200円

著 者 青 木 慧

発 行 者 吉 元 尊 則

発 行 所 (株) 汐 文 社

東京都文京区本郷 1-26-10 中村ビル

TEL 03-815-8421

装幀 アルファ・デザイン

印刷 苅部印刷 製本 東京美術紙工

はじめに

一〇年前、自動車はすでに花形産業であり、トヨタがそのトップ・メーカーだった。あいついで発売する新型車は、そのカッコよさや高速性を売り物にしていた。その新車開発の基礎となる技術開発では、レーシングカーが尖端をいつていた。福沢幸雄は、そのトヨタ・ファクトリーの「チーム・トヨタ」のなかで「一番速い男」といわれ、レーシングカーの開発にも加わっていた。彼は多才で、フアッション・デザイナーとしても、男性モデルやCMタレントとしてもスターだった。「毛並み」もよく、日本の近代化にとって代表的人物・福沢諭吉の曾孫であり、ヨーロッパ人の芸術家である母親の血もひいていた。

△カッコよさとか、孤独などというものは、観る側の勝手な想像であり私とは無縁なのだ▽（『栄光への爆走』ノーベル書房刊）

彼自身はこう書いているが、彼の彫りの深い風貌は、若者が憧れる孤独感を感じさせ、そのふるまひまでが、豊かで新しいセンスと知性に満ちて、若者のアイドルとなっていた。

その幸雄が、一〇年前、突然死んだ。しかも、トヨタの新しいレーシングカーを開発するためのテスト中の事故によるものだった。トヨタは「企業秘密」をたてに事故車を隠し、駆けつけた警察官も事故車の鑑識写真すら撮らなかった。これが「福沢幸雄事件」である。役者も舞台もそろい、道具だともなにか現代のミステリーを予知させるものだった。

新聞や週刊誌なども、こぞってこの事件を報道した。そのとき新聞記者だった私も、この事件の取

材に当たり、事件を書いた一人であるが、マス・コミの脚光を浴びたのもせいぜい一、二年で、もう一〇年あまりが過ぎてしまった。かつてのファンも、二〇歳代だったとすれば、もう三〇歳代になっている。二五歳だった幸雄がもし生きていれば、いまはもう三六歳である。彼は幻のレーシング・ドライバーであり、若者たちの幻影だったのか。確かに事件そのものが、事故のその日、その現場から闇へ葬られようとしていた。しかし、この事件はそこから出発したのであり、一〇年余たつたいまも、遺族たちの手で真相が究明されつつある。それがあと何年で解決するか、いまのところまだ予断は禁物である。

私は気がついてみたら、何年間もこの事件に執着していた。何年間か忘れていたこともあるが、事件が忘れられようとするところから、その執着がはじまっていた。新聞記者をやめてから、なおのと深みにはまっていた。私は前著『トヨタその実像』（汐文社刊）で、この事件の一面を書いたが、つぎのように書いて途中でペンをとめている。

▲福沢幸雄の死をめぐる、私はいくつかの具体的な事実を、この足でさぐってまわったが、幸雄の父、福沢進太郎氏の告訴によって、いまもなおねばり強く真相の究明が行なわれている。その裁判の進行状況もあり、トヨタについていくつか記したこの事件での疑惑を、この書ではなく別の機会をつくって、その真相を必ず明かすつもりである▼

私がこの▲別の機会▼を考えはじめたときから、私の身边でいろいろなことが起こった。そのいくつか、私からその▲機会▼を消そうという意図のものであることもわかってきた。消せるものなら消してみようと思ったとき、その▲機会▼が十分に熟していることを知った。おそらく一〇〇人を超える事件の関係者などに会って、かなりの事実もそろい、事件について一定の判断を自分なりに下せる

ところへきていた。

気がついてみたら、幸雄の遺族が歩んだ道を、あとから追っかけていた。彼らが掘りおこした事実、彼らが感じとった感触に、真相へせまる求心力がはたらいていた。そして、私も同じような信念のうえに立ちはじめていた。民主主義は一人の人間の生も死もけつして無駄にしない。逆にいえば、一人の人間の生命や死を無駄にするような民主主義はありえない。そういう信念である。が、それはある危機感が一方から作用していた。高度化され管理化された現代の社会で、トヨタという巨大企業が絶大な組織と力を持ち、一人の人間の生や死は片隅に追いやられつつある。つまり、トヨタという大樹が繁茂していくその日陰のところでは、民主主義が存在しえないような状況になりつつあるという危機感である。

また、気がついてみたら、△カッコよさ▽とは△無縁▽に生きていたほんとうの幸雄の糸がきれたところから、遺族がその糸をつないで自分たちで一本の糸をたぐって生きていた。その糸がどこから始まっているのかとみてみると、幸雄が生まれた日よりずっと以前からつづいており、諭吉の思想と生涯にも貫いていた。その糸は、血筋などという遺伝的で受け身のものではなく、彼ら家族の地に這った能動的な生き方であり、それら全体が一つの人間ドラマだった。

たった一つの事件を追っていたはずの私は、そのじつ、とまどっている。一〇年間にみてしまったものは、とても一冊の本にまとめきれない深みと広がりをもっている。それを一冊の本に凝縮することができるか、ペンを握りたいま、どうも自信がともなわないのだ。なにかからだの一部を切り落としたようなものを書いてしまいそうな気がする。だが、それでも書いてしまわなければならない△機会▽が、すでに訪れている。いまさら弱音をばくことなく、急がなければならない。

この書のなかでのもう一方の主人公は、いま日本一の優良企業と思われるトヨタ自動車工業である。この書のなかに記したトヨタの言動が事実かどうか、すぐには信じてもらえないことも少なくないだろう。だが、ルポルタージュやドキュメントというものは事実そのものが勝負である信じている。いわば事実崇拜主義のつもりでいる。もちろん、ここに書いたトヨタは、その全体像からいえば一つの断面にすぎないだろう。といってこの一断面からトヨタをみるのが偏見だと思われるなら、前著『トヨタその実像』と併読していただければさいわいである。

また、この書の第一部の「幸雄の死」は、福沢幸雄事件そのものの一〇年であり、真相の追跡である。第二部の「幸雄の生」は、事件に先立つ福沢幸雄の二五年の生きざまを記録した。時間的には第二部の方が先行するものでもあるので、彼自身の生涯に興味がある場合は、第二部から読んで第一部をあともわしにしていいただいてもなんらさしつかえはない。

なお、裁判中の事件でもあり、だれがどんなふうにいっているか事実を明確にするため、捜査や裁判関係の調書の類などからの引用が多くなる。引用は△▽のなかに入れ、著者の注釈は「」のなかに入れる。文中の敬称はすべて省略させていただく。

一九七九年八月

福沢幸雄事件 トヨタを告発する／目次

はじめに

第一部 幸雄の死

第一章 「万霊平等」の墓地に眠る.....	11
-----------------------	----

△ 1969・2・12不帰 25歳▽

大企業トヨタと独立自尊居士	20
福沢の家族との出会い	24

第二章 新しいドラマの開幕.....	31
--------------------	----

だしぬけに「死」の電話通知

「事故経過は私だけが話す」

ニコライ堂の吊鐘かねが鳴る

第三章 真相究明へ遺族の苦闘.....	53
---------------------	----

悲嘆の遺族に脅迫の電話や手紙

厳正な捜査求めて告訴
再捜査へと追い込んだが

59 62

第四章 事故現場——目撃者の怪……………71

事故前夜、小川知子への電話が……

72

テスト責任者が瞬間、よそ見？

73

「私だけが唯一の目撃者だ」

83

第五章 事故現場——“企業秘密”の横行……………89

トヨタに不利益もたらせば解任

90

事故車の鑑識写真も「峻拒」しゅんきょ

95

謎を深めたトヨタべつたりの捜査

101

第六章 トヨタ式どろなわ新車開発……………109

レーサーもおりたコロナ拷問テスト

110

メーカーの虚々実々のレース作戦

114

トヨタ7はヤマハ技術陣が開発

119

ニュー・トヨタ7開発の落とし穴

125

第七章 真相究明——死のプリテスト……………133

ボルシェ908クーペの猿真似

134

直線コース上でハンドル操作不能に

142

実験車から消えていた消火装置

153

死因にも謎、失墜した捜査当局の名誉

164

第八章 秘密協定と“PL作戦”……………169

ゼロ戦パイロットと同じ名誉の戦死

170

消されたもう一つの「死の試走」

176

“PL問題”と新たな欠陥車問題

184

第二部 幸雄の生

第一章 戦乱のパリで出生……………193

父親は留学中の若い日本人学者

194

“ジャンヌ・ダルク”とパリの恋

200

ヨーロッパ流浪からアメリカへ

208

第二章	駆け足で大人の世界へ……………	215
-----	-----------------	-----

	黄色のリングとびかびかした才能	216
	「アイノコ」の屈辱感を越えて	221
	模範にはならない規格外の学生	228
第三章	自分自身を創造する道……………	233

	初めてのバリで生活者として	234
	マイ・ベースで「わが道をいく」	240
	幸雄が考え幸雄がつくって着る	246
第四章	生きつづける幸雄……………	253

	恋——松田和子と小川知子	254
	ドライバーの待遇改善の先頭に	259
	十字架をねかせた幸雄のベッド	264

おわりに

第一部

幸雄の死



第一章

「万霊平等」の墓地に眠る

一九七九年二月一二日は、朝から好天にめぐまれた。土曜日もあわせて三連休の最終日とあって、私は渋滞を予期して首都高速を早朝に走り抜けた。東名高速も順調に流れている。御殿場インターチェンジで東名をおりて北方へ十数分、富士の裾野がひろがる静岡県駿東郡小山町の富士霊園に着く。白い墓石が、枝を刈りそろえた檜などでおよそ二〇〇基ずつ区画され、全部で三万五〇〇〇基、霊園正門からの中央道路を第一ロータリーで右へそれ、さらに左側の砂利道へ入り、クルマを真西の富士山頂に向けてとめた。

山腹まで雪をかぶった富士が、青空にそびえたつ。横から照る太陽があたりに春を呼ぼうとしているが、山頂の春はまだまだ遠い。富士からおりてきた冷気が一帯に沈んで動じない。それでも、クルマに閉じこもってカメラをセットしているうちに、車内だけは太陽が温室にしてくれた。

二時間以上も待っただろう。墓参のクルマのなかではつつましくみえる、福沢の家族のクリーム色のシビックが、尻を沈ませて砂利道を登ってきた。このシビックが鎌倉市内の通称、鎌倉山の自宅をでて湘南海岸ぞいに走りはじめたときには、この陽気に誘われた行楽客のクルマがくりだしていたのだ。ふだんなら一時間半のところを倍ちかくかかってしまった。窮屈な車内からだを曲げていた大人四人が一人おりたつたに、車体が左右に揺れて車高をあげる。

まず、福沢進太郎が背中を丸め気味のまま車外に出た。彼は慶応義塾大学の法学部政治学科の教授だったが、一昨年春すでに定年を迎えていた。いまでも同じ教壇に立ち、学生たちは「私の福沢」のニ

ツクネームで呼ぶ。時間講師で、一般企業でいえば嘱託といったところであろう。つづいてアクリヴィ・シーマ・福沢夫人が砂利道に立ったが、いくぶんよろめいた。かつてプリマドンナとして舞台にたった彼女は、その体格全体で歌い、演じた。舞台を踏みしめていた両足も、いまは長時間折り曲げていたせいもあって不調だ。進太郎と交代でハンドルを握ってきた一人娘のエミが、車外へでながら地味な木綿のコートを着る。彼女はバリの商業デザイン学校（エコール・スベリユール・デザアルモデルヌ）をでたデザイナーである。四年半いたニューヨークをひきはらって、一昨年末、両親のもとへ帰ってきた。福沢の家族三人につづいて、男が車外に立った。足元までの長い黒の法衣をまとった、家族と親しい神父だった。宗派は、とくにアクリヴィが信仰のあついギリシア正教である。

四人のほかにもう一人、いやもう一匹の家族が車外へとびだしていた。チンの一種であるバグの雄で、小型のブルドックの顔を正面からもうひとつおしつぶしたようだ。エミが、『源氏物語』の主人公、美男子の光源氏にあやかって源氏と名付けたが、どうみても「美男犬」とはいえない。彼のマンガ的な表情や挙動が、精神的にも神経的にも疲れがちな家族のあいだに笑いをもたらす。彼は大好きなドライブで活気づき、家族のだれよりもエネルギーに満ちている。彼は「ママ」のアクリヴィを鎖でぐいぐいと引っ張り、先に立つ。まだ一歳の彼は、一区一号の三七〇番墓地に眠る家族の一人を知らない。勢いあまってその区画の前も通り過ぎた地点で檜の幹につながれ、けたたましく吠える。まもなく、家族たちが一〇年前の悪夢を思い出しているのを感じたのか、吠えるのをやめ、おしつぶされた鼻でクンクンと鳴く。やがて、それもやめて静まった。

なんの飾りもない二坪ばかりの墓地。墓石も高さはせいぜい数十センチで、いくら横長になっている。ここから、一帯のゆるやかな斜面につながって墓石が見渡せる。私の目には、それらが同一規

格であまりにも画一的にみえる。

「万霊平等ですから……」

富士霊園の管理事務所では言っていた。この考え方で造成されたところが、福沢の家族、とくに進太郎には気に入ったのだ。自宅から遠すぎるという難点はあったが。

進太郎の祖父で明治の先覚者、福沢諭吉の墓のことを思い出させられる。諭吉は子孫のために△福沢氏の先祖は必ず寒族〔貧しい家がら〕の一小民なるべし▽（福沢氏記念碑）と記している。自身の墓についても、あまり大きなものは建てないでくれ、せいぜい二尺（六〇センチ余）の高さでよい、とつねづねいつていたという。実際の墓石は東京・麻布の善福寺内にあり、諭吉本人の“注文”よりも高い一メートルほどである。が、正面には、

福沢諭吉

之墓

妻阿錦

と夫妻の俗名が並んでいる。彼の偉大な生涯を象徴する法号△大観院独立自尊居士▽は、墓石の右側に生没の年、場所とともに刻みである。阿錦夫人のも左側面に同様に彫っている。

ここ三七〇番の墓石は、一帯のものとはほぼ同様で、ただ、△福沢家▽の上には十字が彫りこまれている。墓の裏側にやっと判読できるほどの文字が横書きになっていた。

△幸雄 1969・2・12不帰 25歳▽

この日は、幸雄をうしなってからまる一〇年になったのだ。幸雄は、福沢夫妻のたった一人の息子であり、エミのたった一人の兄だった。

一〇年前のこの日、静岡県袋井市にあるヤマハ発動機のテストコースで、開発中のレーシングカー、